

25. ポット造林技術

1. 試験担当者

本場造林部造林第一研究室 森 徳 典 ほか
北海道支場造林部造林第一研究室 菊田 信吾
" " 土じょう研究室 真田 勝

2. 試験目的

国有林に於ては、40年度よりポット育苗、鉢付苗造林を事業実行のかたわら試験的にとりあげてきており、一部では実用化試験を行なって遂次事業化を検討中の段階である。そこでこれらポット造林における問題点の解明を行ない、各地域の条件に適したポット育苗、鉢付苗造林方法を究明する。

3. 昭和44年度の経過とえられた結果

○ 本場

実施経過

- スギ、ヒノキをプラスチックポットに直播きし、試験用苗木の養成
- 季節的植栽試験のため、上記養苗苗木を一部林地に植栽

結果

直播苗を養苗する場合、得苗率を高めるためには、無苗ポットが出ないよう若干播種量を多めにするとともに、雨滴、水分管理に充分注意を払う必要がある。

直播苗はその性質上、小苗造林となるため、林床植生繁茂の著しいようなところでは不適当である。苗木の生長は普通の養苗法にくらべてやや劣るようである。また、苗木が不揃になりやすい傾向も若干みられた。

○ 北海道支場

43年度は旭川、帯広各営林局管内の造林地の実態調査を実施したその結果では、活着状況については良好であったが、生長関係では期待された程の結果ではなく育苗又は植栽における幾つかの問題点をみいだすこととなり44年度はそれらの問題点について追求した。その項目は次の3点である。

- ポット鉢付苗の水分および肥料分、死亡に関する調査（支場構内苗畠）

2. 用土別ポット育苗試験(夕張営林署との共同試験)
3. ポット鉢付苗植栽時期試験(夕張営林署との共同試験)

1は、ポット育苗の基礎試験として水分管理と苗木の生育状態および肥料分の流亡を知るためにポット内の含水量を30, 40, 50%との3段階として育苗をおこなった。其の結果肥料分の流亡については現在整理中であつて生育関係においては含水量40%が最適であった。

2,3については、造林地に植栽したので本年度(45年)生長終期の調査によって結果が得られるものと考えている。

4. 昭和45年度の試験計画

○ 本 場

季節別植栽試験のため、前年度に引き継ぎて、4月から12月まで毎月スギ360本、ヒノキ360本づつ植栽を実行する。

春季植栽分の活着と生長調査

○ 北海道支場

1. ポット鉢付苗木は移植に伴う根の切断の度合により根の再生あるいは生長が根形によって異なることが予想される。よって根形の異なる苗木を同一方法で根を切断して、それによつて生ずる再根の状態と生長との関係について調査をおこない、ポット育苗における根形と切断との関係を究明する(支場構内苗畠)
2. 前年度の継続試験である用土別育苗試験並びに植栽時期試験(夕張営林署との共同試験)の調査
3. ポット鉢付造林が試験的に実施されてから本年で5ヶ年を経過しているのでそれ等の植栽地の生長経過の実態について数ヶ所の調査を実施する(旭川・帯広局管内)